

1434 1458 0.311 x 6 x 300 = 559.8 1478 4/5 1/2

参考 2008 1857 1857

【里】

現在の我が国の「里」は、約四「キ」とされている。

しかし、古代中国の「里」を考えた場合には、注意が必要である。基本的な長さの単位「里」は、時代によ

って異なる。つまり、一里は、約四「キ」とされている。水に追随して、里も、定まるところを知

らないかのように変遷しつづけたからである。たとえば、中国における一里を年代の新し

いものから古い方へ順に並べると、次の通りであった。

唐の時代の一里は、約五六〇メートル。漢和辞典「小林信明」小学館付録二四頁参照

魏・晋代の一里は、約四三四メートル。後漢時代の一里は、約四一五メートル。

秦・前漢の一里は、約四九八メートル。*なお中国では、一里は二〇〇歩、一歩は六尺とされたという。

秦始皇帝が、その統一以前、地域に、まちまちあった度量衡を統一したというこ

とから推測すれば、その統一以前の時代、周の時代には、さまざまに里の加存

在していたの、と観察される。とはいえ、言うまでもなく、周の時代の各国で

$\frac{200,000 \text{ m}}{3000 \text{ 里}} = 66.66 \text{ m}$, $\frac{200,000 \text{ m}}{2000 \text{ 里}} = 100 \text{ m}$
 全く かんぱうな 勘定 493 1,458' 1,459' 1/2 平几社 地回 29' 紀上 254' 宇都 1471' 200km 1472' 1/2 74

どのような里が使用されていたのか等
 知る術さえないようになつてしまつてゐる

いかしなから「魏志倭人伝」や「日本書紀」

崇神六十五年条「朝鮮半島南端と筑紫」

紫國周の距離を、三千二千里程と述べてい

る「東松浦半島北端の呼子までの実際の距離

は、約二〇〇「ヤ」である。

とすると、「魏志倭人伝」や「日本書紀」が

概略六〇一〇「ヤ」ほどであつた勘定になる

これは、秦と魏の中国の里程（一里二四〇

〇五〇〇「ヤ」とは「まったく噛み合はな

いに思われる。

やはり、倭国の一里を論じる場合には「

秦より前の「周」の時代のままで「

考察する必要がありえよう。

*

今となつては

洛陽が
129^ル
息土
大カワ843^ル
はか
洛陽が23144^ル
13189^ル
洛陽が23144^ル
129^ル

1459^ル - 3/2

平八社地図
38^ル
大カワ
山
小
山
大カワ1476^ル
玉
大カワ1205^ル
1464^ル - 1/2 9^ル

リで 2316^ル
里程 里数
念頭 1734^ル

ては、
の里程について、
の文献を見てみよう。
漢の高祖の孫、劉安が撰した、淮南子に
「崑崙（昔、中国の西方にあると考えられ
た聖山）今の崑崙山脈西方の高峯（ハ六一
ト）のことであろうか」の上には木禾が生え
てゐる。珠樹・玉樹・璇樹・不死樹が山の西
面にあり、沙棠・琅玕が東面にあり、絳樹が
南面に、碧樹・瑤樹が北面にある。傍らには
四百四十の門かならび、門の間は四里、里の
間は九純、純は一丈五尺である。中
略）
（夏初代の帝王）は、息土（掘ればま
すます無限に地盤が隆起する土地）をもつて
（黄河の）洪水をふせぎ、名山を造り、崑崙
の虚を掘りくずして大地とした。
と記されているという。（「洛陽伽藍記・水
経注」平八社、一二八頁参照）

し九

30,703 ①1461^{1/2}
①1467^{1/2}

OK ①1435^P

1.461^{P-1/12}

全 ①1576^P
唐突 1576^P
「か」なから 次頁

OK ①1435^P 157

トール (一尺二七・六五セニ) を、参考迄に
 代入してみよう。すると、
 へ一里九純九×十五尺二三七・三三トール
 という計算になる。
 ・何とここに
 へ一里二三七・三三トール
 といふ、小さな里数が現れる。
 周代に用いられていた尺・
 唐突にも、へ一里二約三七トールと定められた
 とは、考えにくい。うにも思われる。
 予こで、先に述べた、周代の尺の一つであ
 るへ一尺二二・五セニ という数値を代入
 してみよう。すると、
 へ一里九純九×十五尺二三〇・三七五
 トール
 となる。
 *なお、三〇・三七五尺であり、三・五セニである。
 ・ともあれ、なんと、
 へ一里二三〇・三七五トール

H3.10.16 (水)
→ H10.4.29 (日)

ニロウ云
田部 797

1,461^{P-3}/₁₂

まで
「しかたなく」→ たか 論外 2365
す 1459¹² 499

と、いう、極めて小さな里数^{リすう}が出現^{しゅげん}する。
■ 確かに^{たしか}、論外^{ろんがい}とも思えるような数値^{すうち}である
はみ出した、一般^{いっぱん}的な常識^{しやうじき}の枠^{わく}から
りやどうみても現実に存在^{ぜんざい}した里数^{リすう}とは考えにく
い。
■ 一^いかながら、そうした疑念^{ぎねん}を全て打ち払^{うちはら}
い、次のような経緯^{けいゐ}を考え^{かんが}てみたい。
(1) 秦始皇帝^{しやうしやうてい}が度量衡^{りようけい}を統一^{いつい}する以前の^{いぜん}一里^{いちり}は、
地域^{ちいき}によってまちまちだったようである。
(2) そんな情況^{じやうきやう}のあつた周^{しゅう}当時^{とうじ}、ある地方^{ちほう}
の人々は、一里^{いちり}三〇・三七五^{さんじゅうさんしちご}という里数^{リすう}
を採用^{さいよう}していたのではなからうか？
(3) そして、秦始皇帝^{しやうしやうてい}によって度量衡^{りようけい}が統一^{いつい}さ
れた後^{のち}においてさえも、なお、閩越^{いんえつ}など
の小地域^{せうちいき}では、一里^{いちり}三〇・三七五^{さんじゅうさんしちご}という
単位^{たんゐ}に固執^{こしつ}し続けていたのかも知れない。
(4) ところが、前漢^{ぜんかん}の武帝^{ぶてい}によって、閩越^{いんえつ}討伐^{とうはつ}
が行^{おこな}われた。
(5) その時^{とき}、祖国^{こくこく}を追^おわいて会稽^{かいけい}
から東遷^{とうせん}した倭人^{わじん}達は、古来^{こらい}の伝^{でん}統^{とう}的^{てき}な
里程^{りてい}である一里^{いちり}三〇・三七五^{さんじゅうさんしちご}という

ここ

$1459^{\circ} - \frac{1}{2} 14^{\circ}$
 30.375°
 30.303°
 0.072°

$1.461^{\circ} - \frac{3}{12}$
 $1461^{\circ} - \frac{3}{12}$
 1434°

単位を、この東海の洲島へもたらしたのであらう。

いうまでもなく定かでないが、とりあえずこう仮定してみたい。

*

ところで、この一里（二三〇・三七五）の百分の一、つまり三〇・三七五と、いう数値は、現代の曲尺の一尺（三〇・三）と、めてよく似ているように見受けられる。

両者の差は、わずか〇・七二リである。

すなわち、

一里（三〇・三七五）の百分の一が、ほぼ曲尺の一尺（三〇・三）に相当する。

といえよう。

これは、たまたまの一致なのだろうか。

それとも、二者の間に何らかの関連性があるのだろうか。

と、興味深く思われる。

解き
 そこで、ここに見てみると、尺についで、種々の見

どうやく 日本では律令制で小尺と7採用とある

①1434

$\frac{24.2}{30.3} = 0.7986 \approx 0.8$ 奈良の大仏 周尺

1,461-4/12

紀下262注2 「初出」とある

続紀録

続紀録①-29?

①-53? ①-53? ①-53?

百廿九 30-281?

HV

という、類

①日本で物差がいっから使用されたのか「正
確には分かっていないが、
日・続日本紀B文武天皇の大室二年（七〇二）
三月乙亥（八日）
「始めて度・量・天下の諸国に頒つ」
とあって、これが初出である。
②また、大室律令には、物差に関する規定が
みられる。それによれば、大尺・小尺の二種があ
って、大尺一尺は小尺一尺二寸にあたり、大
尺は土地の丈量に使い、小尺は他の用途に用
いた、という。
（「世界大百科事典」平凡社
測量および校地）
△物差参照
尚、唐尺の一尺二三・一〇セシ
異説として、「唐尺の大尺は三〇・三
セシ、小尺は二四・二セシ」とする説がある
（「漢和辞典」小林信明、小学館、
末尾の一四頁参照）
・そして、我が国の律令制の物差は、唐の制
度を模倣したものであろうと考えられており
「これら（我が国の）大・小尺がどのくら
いの長さを有していたか明らかでないものの、
大尺一尺はだいたいい曲尺一尺と同じであらう」

天つき
改行

という。(「世界大百科事典」平八社へ物差
参照)

・こうーた記述によると、曲尺の起源は、
唐尺にあるようにも思われる。

倭人の
つまり、

△一里(三〇・三七五セシ)の百分の一が、
ほぼ唐尺の一尺(三〇・三セシ)に相当

する

というの、全くの偶然なのかも知れない

■ もーもそうだとすれば、次のような経過が
考えられよう。

(1) 倭国では、古来、一里(三〇・三七五
と)いう里数を用いていた。

(2) そこで、いつ頃から、一里の百分の一を
一尺(三〇・三七五セシ)と呼びならぬすよ

うになり、この里および尺を主として土地の
丈量に用いた。

(3) 唐の時代になつた時、唐尺として、大尺お

よび小尺が定められた。

* 時に、唐の大尺(三〇・三セシ)と倭国の測

地用の一尺(三〇・三七五セシ)とは極めて

近接していた。

④1453^P
1¹/₆ = 6尺 1里 = 9¹/₂ = 9x15尺 ④1461^P - 1/12 末
令和2年(2020)1.4(土) ~ 16(4回)

1.461^P - 6/12

いせき
遺跡 113^P
事例 1135^P

④1480^P 同文 ④1481^P 同文 ④1461^P - 3/13
0.3030303曲尺 = 39.303 cm
天? 改行

(4) やがて我国では「曲尺」が定められ、一尺は
三〇・三〇三セシを標準とするようになった
といふことなのであろうか。

もともとはなはだややこしいものだから

〈唐の大尺は約二九・七セシ〉
とする見解もある。(「まぼろしの古代尺」)

新井宏、吉川弘文館、五頁参照

あるいは、(唐尺とは無関係に)倭人達が

用いていた倭尺(三〇・三七五セシ)が……

曲尺(三〇・三〇三セシ)に移行したのか、未知小なり

※ 移りかたは、(唐尺とは無関係に)倭人達が

それでは、唐(六一八〜九〇七年)以前に

併用すると思われる我国の遺跡等の中から、八一

里三〇・三七五¹/₁₂であつたことを示唆

している事例を探してみよう。

ト

尺の二尺(三〇・三〇三セシ)の百倍が一里(三

〇・三〇三セシ)をあり、

一尺は二二・四四六七セシ(一里は九尺九寸五厘から

一尺は二二・四四六七セシ(一里は九尺九寸五厘から

一尺は二二・四四六七セシ(一里は九尺九寸五厘から

一尺は二二・四四六七セシ(一里は九尺九寸五厘から

唐の「大尺」を参考にしている

改訂

柳田川
改訂
2251

斎宮志 7P
三重県地図 地価
新市町村 584

マイワ サイク タケガワ
明和町斎宮 4461
新市町村 160

1.461-7
12

注
「起源」
次頁
古代の道と考ふる 60
斎宮志 22, 14
和歌山 461 24/12 64 74 855

斎宮 855 伊勢神宮に奉仕
斎王 853 = いづきのみに129
伊勢 853 伊勢 853 伊勢 853
斎院 853 加茂に奉仕 百科年(12)-7

斎宮跡

① 斎宮跡は、伊勢神宮に奉仕した皇女のことであり、天皇の名代として、天皇の即位ごとに未婚の内親王または女王から選ばれた。
② また、その居所をも「斎宮」と称する。(「伝説」他参照)

斎宮跡は、伊勢神宮の祭神である天照大神

の御杖代として天皇の代替わり毎に派遣された斎王の御所、およびその運営に当たった斎宮寮(斎宮に関する一切を掌った役所)の遺構である。

記・紀や日斎宮記によれば、斎王の伝承

は非常に古く、山宗神天皇の時代に始まるという。しかし、その制度の初見は、七世紀後半の天武朝になってからである。

また、斎宮跡の創建年代は詳らかでないものの

十四世紀前半の後醍醐天皇の御代まで、数百年間にわたって存続したと考えられる。

遺跡は、現在の松阪市と伊勢市との中ほど

伊勢神宮(内宮)の北西約一四キロ、多気郡明和町

和所斎宮および竹川の一带に位置し、柳田川

の分派で、斎王の棲ぎの場であったとも言われる。

柳田川(第18図参照)の右岸(南岸)下標高九七一四

メートル前後の平坦な地にある。近年、その大半が

優良な畑作地帯となっており、遺跡東辺を北から南

この斎宮跡の概要を見てみよう。

2013年 参考までに述べると

地味な風景

大元 元1406
段・互太間以前は360歩 日本書紀 506 新羅本の史2 大化改新645年
日本書紀 506 新羅本の史2 大化改新645年
元959 209P 元1328 1.461-12

天守
改行

④1461-12 12月 すむわ
⑤1462 7月 2月

大元
文武天皇
在位
697-707

文武朝の

時新
617
元
1348
(701年)

へ流れる現在の絵馬川にはほぼ重複して検出さ
れる大溝（幅約四丁、深さ一丁前後）を東限
として西へ七区画分、
ている伝承地の南側を北限として南へ四区画
令の、一辺約一二〇丁前後の方格地割が、幅
十丁ほどの道路とその側溝によって形成され
ている。
すなわち、七×四二八区画があり、その
水の一区画は、一辺約一二〇丁前後である
という。考古学上第四六号へ古代の道と
考古学上雄山閣出版、六〇頁「齋宮志」山
中智恵子、大和書房、七二二頁参照）
参考次に述べる地割の起源は明確でなく、
（1）大化改新（六四五年）以前からあったもの
改新によって強化されたとする説
（2）大化改新によって施行されたという説
（3）可能性が強いので、方格地割の採用は部令
的には古く溯るにせよ、整然とした系理制が
施行されたのは、「大宝令」（七〇一年）以

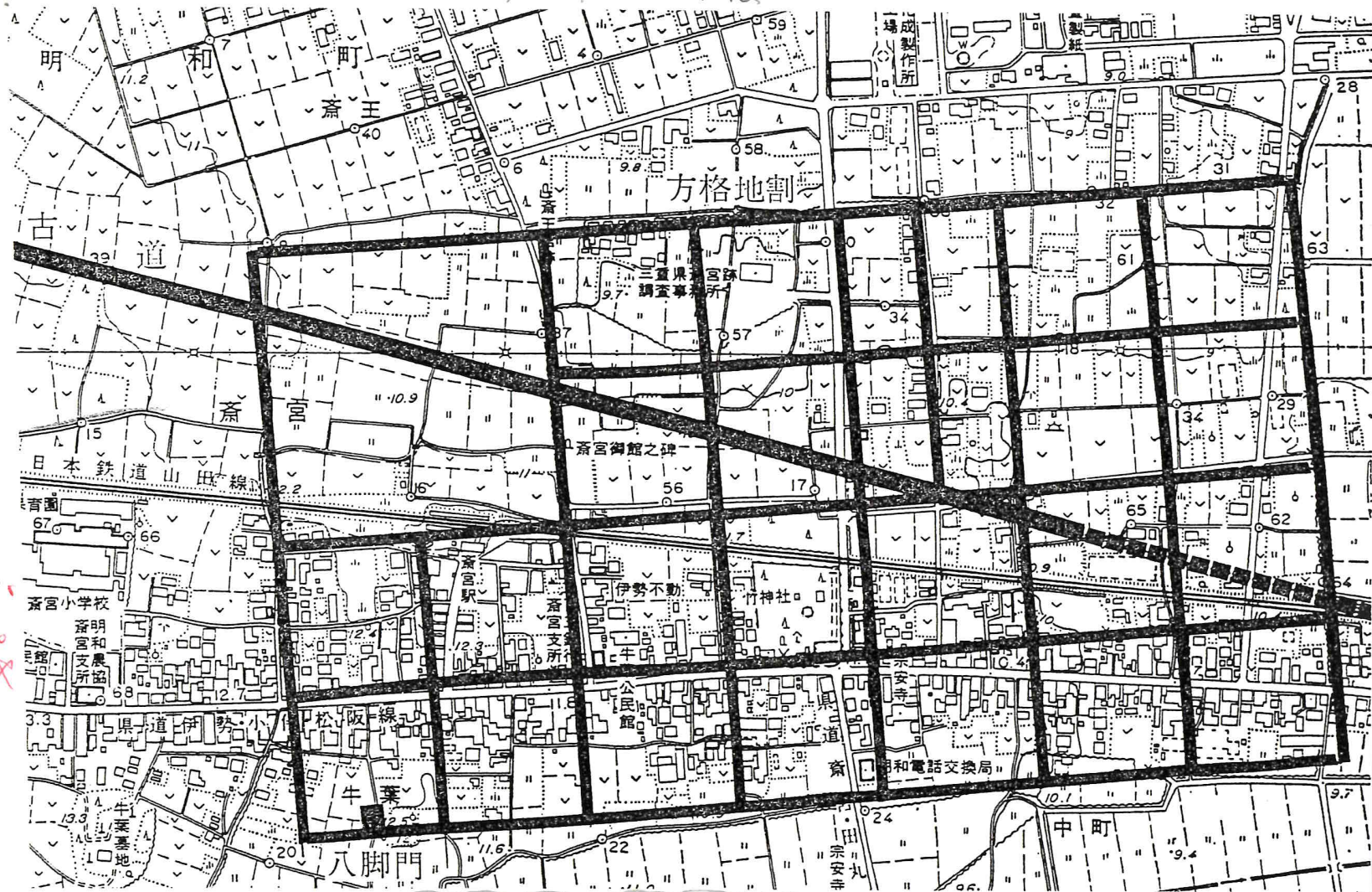
1461P-9/12

1 明和町

2 方格地割

古道

3 斎宮



1~38、1ボタ、
ゴ4に変えて下さい。
黒い太線内の白い点や
線をなくして下さい。
(真黒にする)

ゴ4
13QG

中心のわけ

14QG

第255図 斎宮跡、方格地割の道

『季刊考古学』雄山閣、1994年(平成6年)2月1日発行、61頁「奈良時代の古道と方格地割」参照。

日本史
506p

1461-10/12

町元 1447

1町は60間、約109m 1歩=6尺

小林 656^p 1町=360尺=60歩
本 114^p 60×3=360歩

企本の土代遺跡

新企本の土代(2) 308^p = 6×30.3
= 181.8m

217^p 181.8m × 360 = 65448m



後とする説
などがある。
一方、日条里制というのは、土地を其盤目
状に整然と区画したもので、六町へり三六〇
歩、約六五四、四方の方格地割を里と呼称
する。
そして、六町四方の方格地割(里)の各辺
を六等分して三六の区画に分割し、こうして
できる一辺一町(一六〇歩)約一〇九、四
方の方格地割を坪と呼ぶ。したがって、一里
につき坪が三十六個存在することになる。
〔新・能本の歴史〕(2) 能本日新聞社、二
八頁。〔能本の上代遺跡〕田辺哲夫、能本
日日新聞社、二一七頁。〔日本史辞典〕東京
創元社、条里制(参照)
ようするに、
条里制にみられる方格地割の一辺は約一
〇
九、

こ

原文に
こう記述して

1.461^{P-11}/12

2.265^P

③1461^{P-1/12} 2055

であつて、両者の性格は明らかに異なつてい
る。といえよう。

定かでないが、あるいは、

へ齋宮跡の方格地割の一辺約一二〇トは、

四里（三〇・三七五）×四里（一一・二一・五

ト）であつた。

ということをおぼろげながら示しているのかも知れない。

*

④1461^{P-6}/12
1355

内宮・伊稚宮間、ハ十三里

の内宮から東南方向の志摩の国へと小川（本采

改頁
1355

こ

山径 916

54.282 Km

神宮 官幣 506

伊賀 3382

「伊賀神宮」110°112° 「小町」88°17分

1.461

1058

1280

の五十鈴川沿いにたどってゆく道が開かれ
た。これが、志摩路である。

「そこで、この道の左右の山々は島路山
と呼ばれるようになり、内宮ご正宮の正面の
樹間を流れる五十鈴川の上流域は島路川と名
づけられた。

もともと近來は、内宮の南の神路山の方か
ら北流し、御手洗場へ注ぎ込んでいる神路川
を、五十鈴川本流と称してゐる。(第16図参照)

島路川を溯って、国境の逢坂峠を越えたと
皇大神宮の別宮伊賀宮の鎮座になる伊賀の
神戸の里へ出る。(写真図版222へ伊賀宮の正殿参照)

さて、皇大神宮ご鎮座の昔、倭姫命が、大
神に差し上げる御贄の供給地を求めて志摩の国
へお出でになり、その折にご創建になったと
いう伝承を持つこの伊賀宮は、
も「大神の遙宮」と記され、早くから春の祈
年祭、秋の神嘗祭の二度ともに官幣がお供え
され、いた。

は、八十三里、一里を六町(六五四町)とし
て約五十五キロの山径を参向したの

志摩半島中央部にある東から西へ深く入り込んだ矢張り最奥の所

たまにやわら

1462^P-1/5

天のうすめ
④2890°-1/2

・カウー
・頁の上半分



④3382-7/5 写真版

写真版 222 伊雑宮の正殿

『全国一の宮めぐり』学習研究社、2004年1月15日発行、95頁参照。
 ・伊勢神宮内宮と同じ「唯一神明造り」である。屋根の堅魚木は6本。内削ぎの千木が高くそびえる。
 835

しかし、千年の昔この島路が通っていたと
すれば、五十五里もあるはずはない。よくよ
く遠まわりの不便な道を往来したものだと思わ
れる。L
という。(「伊勢神宮」榎井勝進、学生社
一一〇―一一二頁参照)
内宮と伊稚宮との直線距離は、約十一里に
すぎない。
なるほど、いくら不便な山道であつても、
五倍(五十五里)もの道を歩いたとは考えにくい。
そんなに峻険な山が并立してゐるわけでは
ないからである。
では、どう解釈すればよいのだろうか。
簡易的に「ハ一三里」、「ハ一二里」ハ
「ハ二一里」などと記されてゐたものを、誰
かが「そんな筈はない」と思ひ、
三里」と書き改めてしまつたのかも知れない。
もしもそうなら、一里は約三のふとして、そ
の距離「ハ〇〇余里」は、約二十四里となる。
●直線距離で約十一里の山道が、くねくねと
曲り曲つて、二倍程の距離になつてゐたので
あろう。――などと想像される。

伊勢神宮
1113年
新
前頁

志摩路

18尾
 3/3 km
 120里
 3.65 km
 180里
 5.47 km
 60里
 1.82 km
 49.内

八尾街道・長尾街道・竹ノ内街道
 難波宮から朱雀大路を南下すると、八尾街道（磯齒津路）と直交し、そして長尾街道（大津道）と直交し、さらに竹ノ内街道（丹比道）と直交する。（第256・257図参照）
 つまり、八尾街道・長尾街道・竹ノ内街道の三道は、平行に、東西方向へ延びていたと考えられる。
 ところで、八尾街道―竹ノ内街道間は約五・五キであり、八尾街道―長尾街道間はその三分の二ほどの距離だったようである。（「考古学」第四六号へ古代の道と考古学）雄山閣出版、五〇頁参照）
 あるいは、かいたら、一里二・三〇・三七五と、この単位を用いて、
 八尾街道―竹ノ内街道間は、一八〇里（約五・四七キ）
 八尾街道―長尾街道間は、一二〇里（約三・六五キ）

ごかいどう
五街道

小林 871
元 359^D

7.15

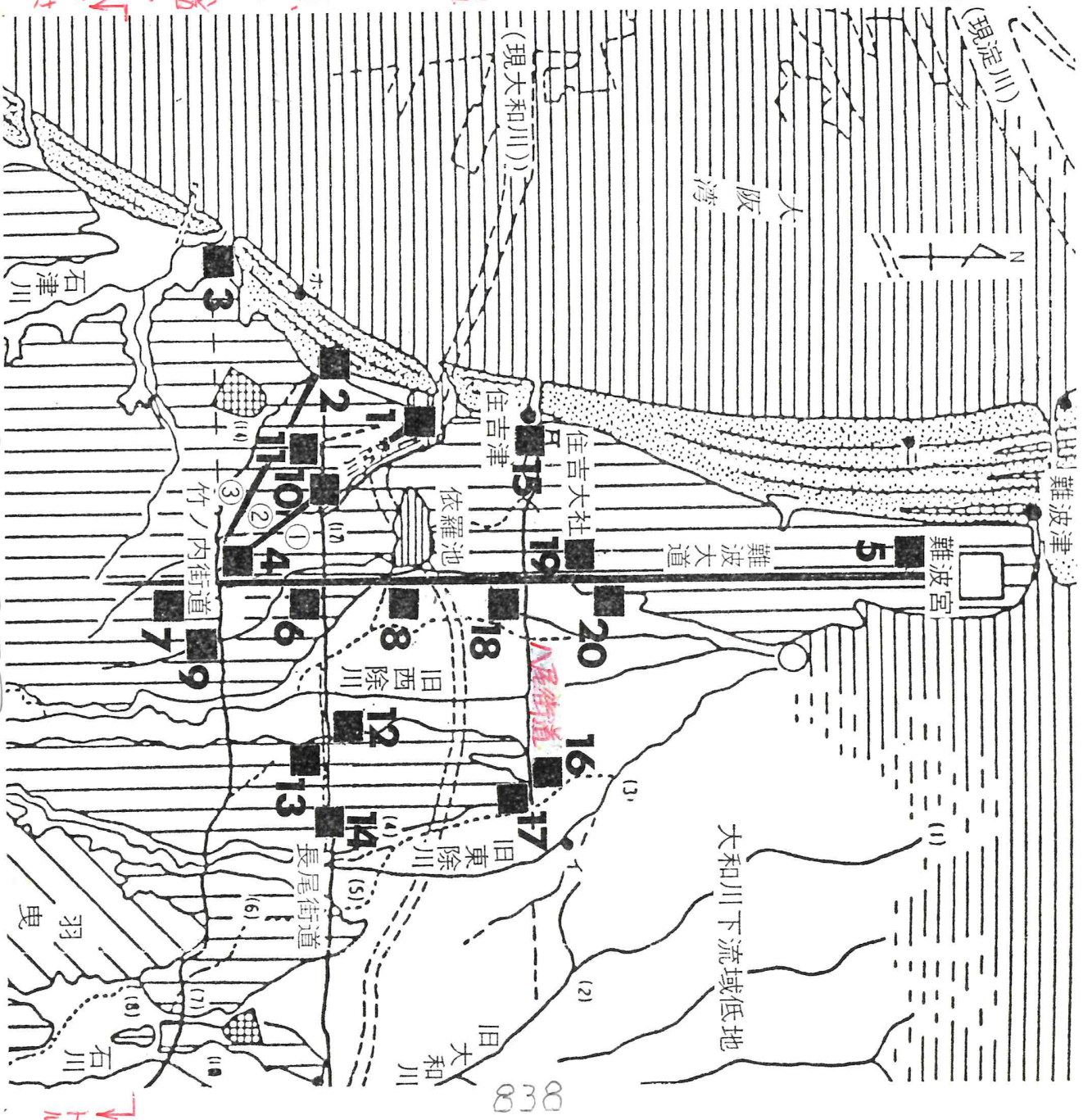
白黒、撮影して置く。

- ・右翼の立場
- ・大きく上へ
- ・はみ出させて
- ・下へ。

1.462^P-4/5

下
八尾街道
八力
下三。

- ・難波大道、八尾街道、長尾街道、2ヶ、内街道、の4ヶ所、字を、大々、コナ、コナ、変更した。



1405

第256回

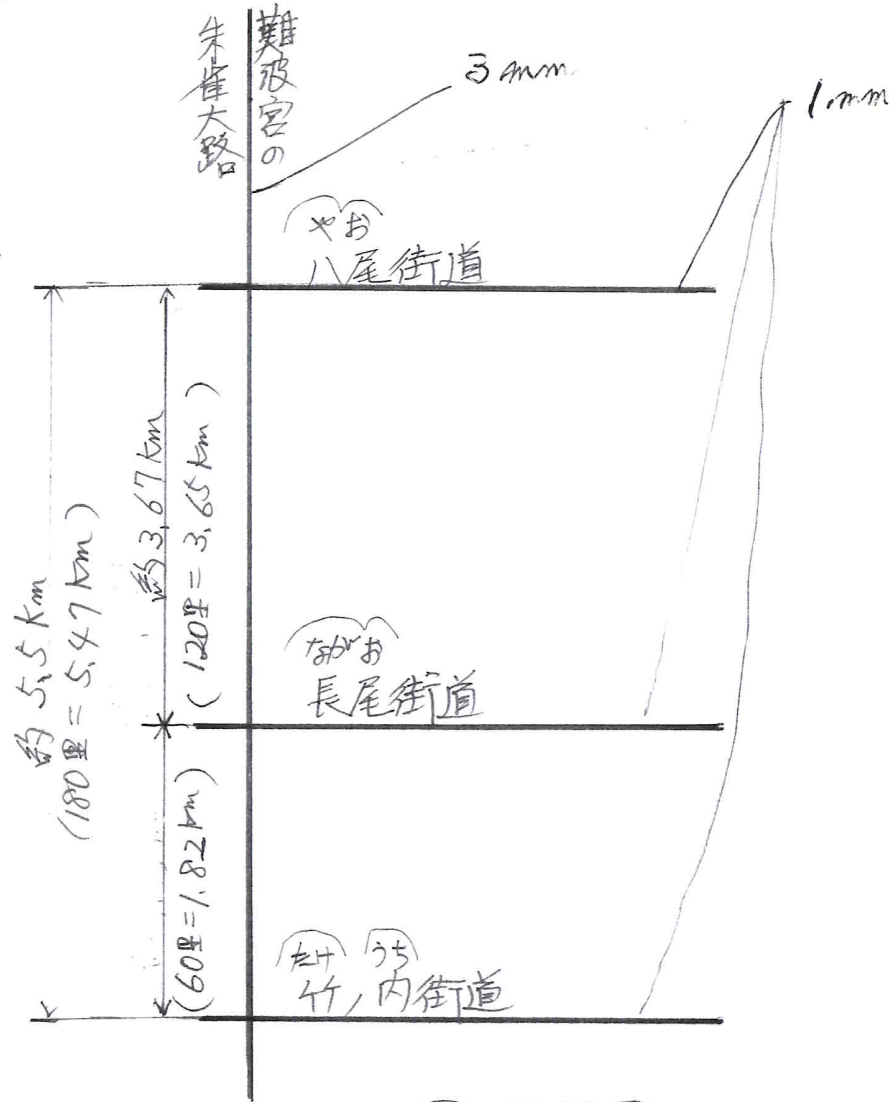
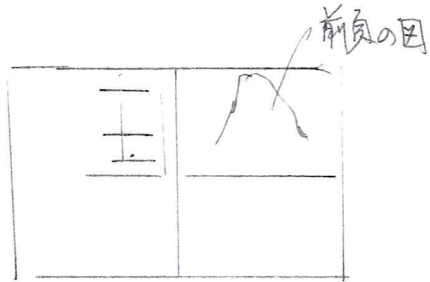
也。お屋。長尾。竹、内街道

1306

『季刊考古学』第46号
 古代の道と考古学
 雄山閣
 1994年2月1日発行
 50頁
 参照

1462^p-5/5

- ・左頁の上、右側に掲載下さい。
- ・上に、大きくはみ出させる。



14.2G
第257図 やお ながお たけ うち かいどう
八尾・長尾・竹内街道(想像)

1,463^P-1/3

官道 溝と溝の間が18m 1450^P
17行

(3) 長尾街道一竹ノ内街道間は、六〇里(約一・

ハニキ)

と設定されたのかも知れない。(要検討)

*

上: 頤 11 分

H19(2007)1.25(木)

H30(2018)3.25(日)~3.26(4回)

H30(2018)3.30(日)~

令和2(2020)9.12(土)~9.15(4回)

タイトル①1168^{1/2}

①1173^{1/2} 15分

1.463^{1/2}-3/3

(こと)

大分1028' 数 吳漢ス

大分362' 周 吳漢ス

「みだり」にほころ

とあるたから

聖徳太子以降の日本人と見られる

IF 9/14
9/13

(*)

法大お。照ミと。なと字典は木とと新と言日本新唐都「日本国」の都は方形で、周は千里ある。中国へ朝貢した日本人が、小狼田宮の規模について、

「洛陽の都の」大市の周囲は八里であった。北魏洛陽の社会と文化。服部克彦。ミネルヴァ書房、一四四頁。巻頭の第11図参照。

「何とまあ、いいかげんなことを言うのだ。妄りに夸っている」と感じられたのではなからうか。

日本の都城の説明を聞いた中国人達は、驚き、啞然としたであろう。

「都方数千里」と漢音で「シユ」と発音する。漢字の字は漢音で「シウ」と発音する。漢字の字は漢音で「シウ」と発音する。

「日本国」の都は方形で、周は千里ある。中国へ朝貢した日本人が、小狼田宮の規模について、

「洛陽の都の」大市の周囲は八里であった。北魏洛陽の社会と文化。服部克彦。ミネルヴァ書房、一四四頁。巻頭の第11図参照。

「何とまあ、いいかげんなことを言うのだ。妄りに夸っている」と感じられたのではなからうか。

日本の都城の説明を聞いた中国人達は、驚き、啞然としたであろう。

「都方数千里」と漢音で「シユ」と発音する。漢字の字は漢音で「シウ」と発音する。漢字の字は漢音で「シウ」と発音する。

コクヨ ケー20 20X20
①1173^{1/2} 小の56P
①1356^{1/2} 第11回大説
①1356^{1/2}-2分

前頁8分

842

(こと)

原文「流行」とある

こと

1,464 $\frac{1}{4}$

平野社資料①-584
地図 24° 38' 50"

大カンワ682° $\frac{1}{4}$ 崑崙山 ヒルビ有る。

洛陽 崑崙山間の距離

中国の方に目を転じ、洛陽から崑崙山まで

の里数について検討してみよう。
崑崙山に關連する文献・その他を列挙する

①「中国古伝説中の崑崙山は、現在の崑崙山

脈を指すのではなない。もととの崑崙山は、
黄河の源とされ、遠い西方にある山だと考え

られていった。はじめて比較的中原に近い土地
にあるものと想像されていったが、地理的知識

の拡大につれ、河原がさらに遠方の地にある
ことがわかり、その後退していった。

また当初崑崙山は「天に達する高山」として、ある

いは美玉を産する山として知られていたが、
戦国末期から神仙説が広まり、不死の水が流

れていたりとか、西王母という仙女が住んでい

HV
あてはめられ

7112 ⑦ 1401-1/3

赤-9=河・タリム河
平沢社地図 39P

平社地図 38Pに付 K₂山 とある

中国西部地方の
④地図を見ると、タリム河の支流「ホータン河」の上流域に、ひとときわ抜き人出た高峰があつて目にとまる。
その山の名を、現在日ゴツドゥインオースチニン山とも呼んでゐる。これは一八五二年に世界最高峰と認められたエベレストは、それ以前よりヒマラヤ一の高山である。
異論はあるうか、仮りに『平蔵』五年五月二十八日余考へて離れて、崑崙山は、崑崙山脉の西端から少し離れて、高く聳える最高峰日ゴツドゥインオースチニン山（K2山）である。と考えてみたい。（以下写真図版第223、258、259、260図参照）
洛陽からこの山までの直線距離は今日の地図上で測つて約三〇〇〇キである。他方、洛陽から崑崙山までの距離について述べてゐる日水経注は河水篇卷一にはぐさだややこーいかがどうやらで①一里四〇〇、②五〇〇ト云とする里程の二つが、同居してゐるように見受けられる。この崑崙の墟は、西北（西方の誤り）にある。（中略）嵩高（洛陽の南東の嵩山）三伏九去ること五万里、地の中心である。日禹本紀にもこれと同じ記載である。

平A社38和国
高等地図455に和蘭

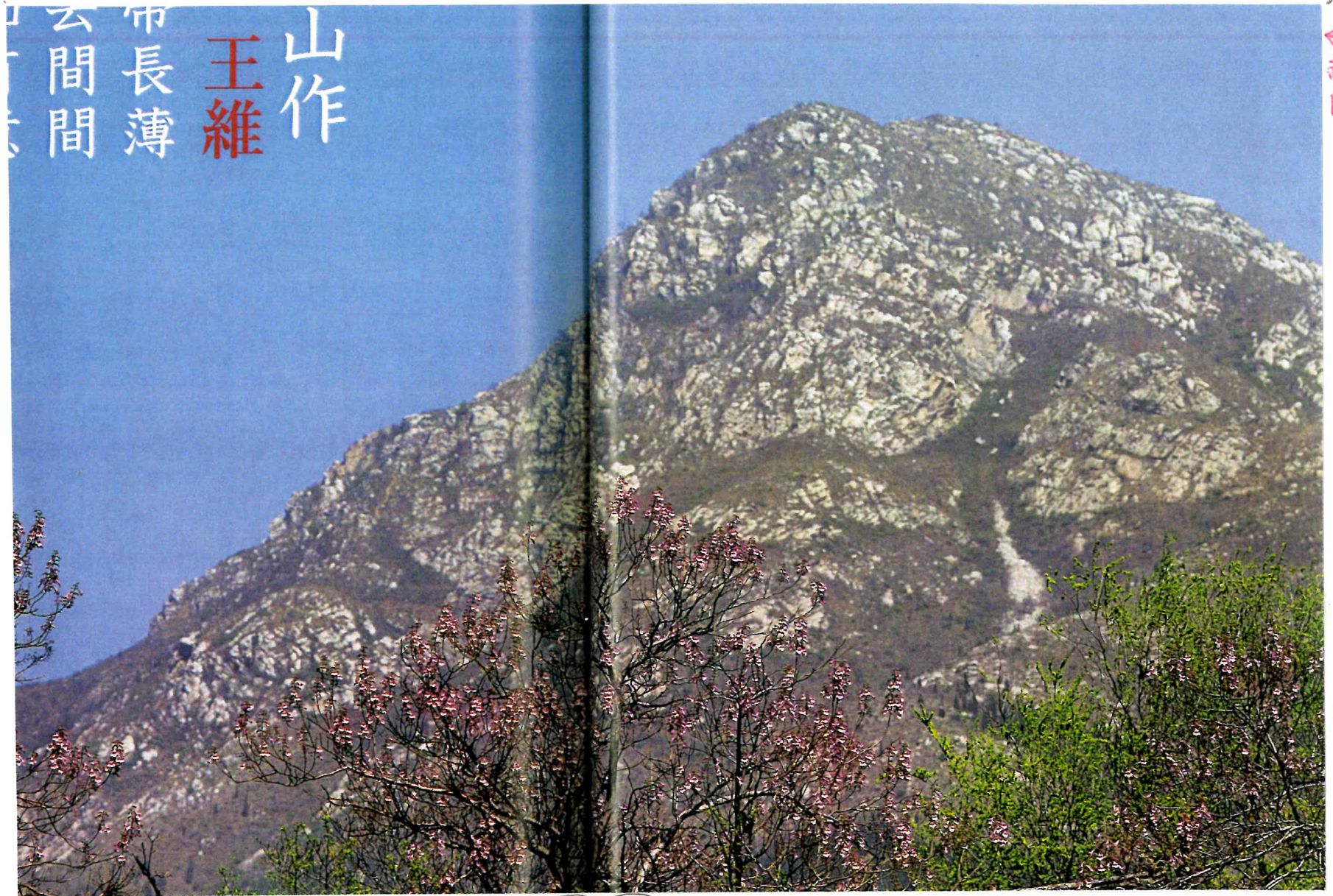
陽陽から2回ケヨ ケー20 20x20 坪、嵩山(おさん) 1440m
 130°注4 74坪地 34° 嵩山 1369m 高坪地 嵩山 2440m

4月22日 22° 3200km
 「ついで」 ①1464 $\frac{1}{4}$ 587
 「度々」 31 " 657

平均社地
 24 800 km
 x 4 = 96 km
 5 file
 1464

1464^p 4/4 目立たないようにお願ひします。

字はマヌ
・カラー
・右頁上半分に
大きく掲載
下さい。



赤い横線
トル

中心の切りわけ
ゴッ4
140G

中心
の切りわけ
110Gゴッ4

130Gゴッ4

写真版 223

すうざん
嵩山

(洛陽の南東約60km 標高1440m)

『ビジュアル漢詩 心の旅』

監修 石川忠久

写真山口直樹

世界文化社 38~39頁参照

846

・左頁上半分に
左右をはみだせり
掲載下さい。

- ・ 0.4ミリの線でトレースをお願いします。
- ・ 文字は、全てゴシック。

崑崙山脈

カラコルム山脈

* 往古の中国人が思い描いた『崑崙山』か。
K2 ^{シシガン}ゴッドウィンオースティン山 (チョゴリ山)
8611 m (世界第2位の高さの山)

タクラマカン^{さばく}砂漠

1424

第258回

三人三人

④ 次頁

22 7/11

元 4 月

西端大彎元 K2 (想像圖)

13QG

(x) はく

二んろいさん

* タクマカン砂漠^{エリガ}から見た「崑崙山」

二八五

6 せん かん

是日

120G

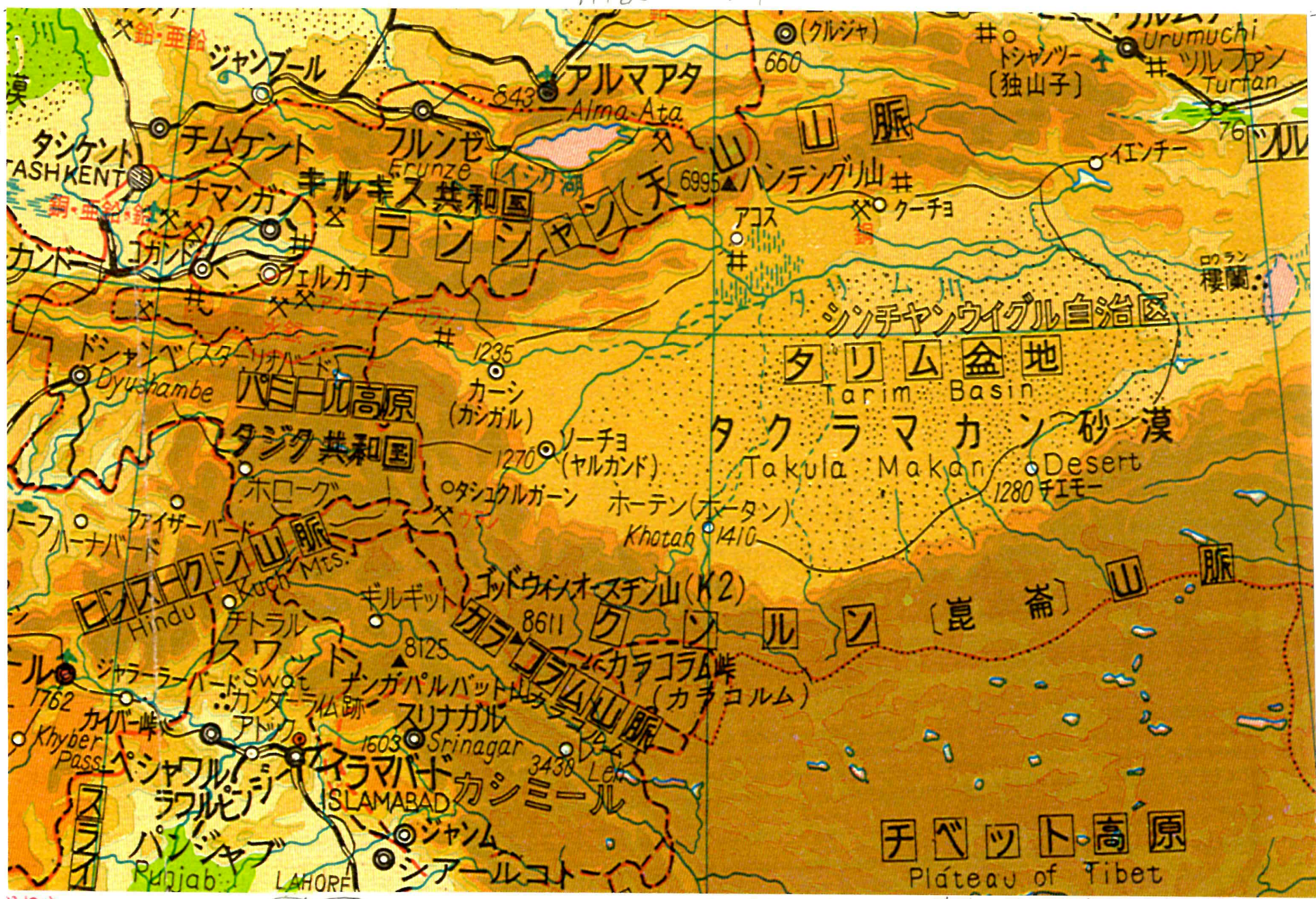
大邑 4-11-

- ・ K2 (8611 米) は、崑崙山脈 の先端に、ひときめ高く聳えているように見えるのだろう。

令和2(2020)9.19(土)
大阪大学名誉教授
森田孝史様にお手紙を届けた
K2の北から見た写真。

1,465⁷ - 2/4

カラー
版の
下巻に
掲載
下さい。



中心のりわけ
中心のりわけ 1465⁷ → 第259図 崑崙山脈近傍地図
『新詳高等地図』帝国書院、昭和49年6月30日発行、25頁参照、848

8611のまわりを、横長の長方形状に白抜きとする。
その白抜きの中に、太いゴシックで 8611 と入力して下さい。
印は、黒のまま。(赤くした、火山になるから)

白抜き
数字黒

8611

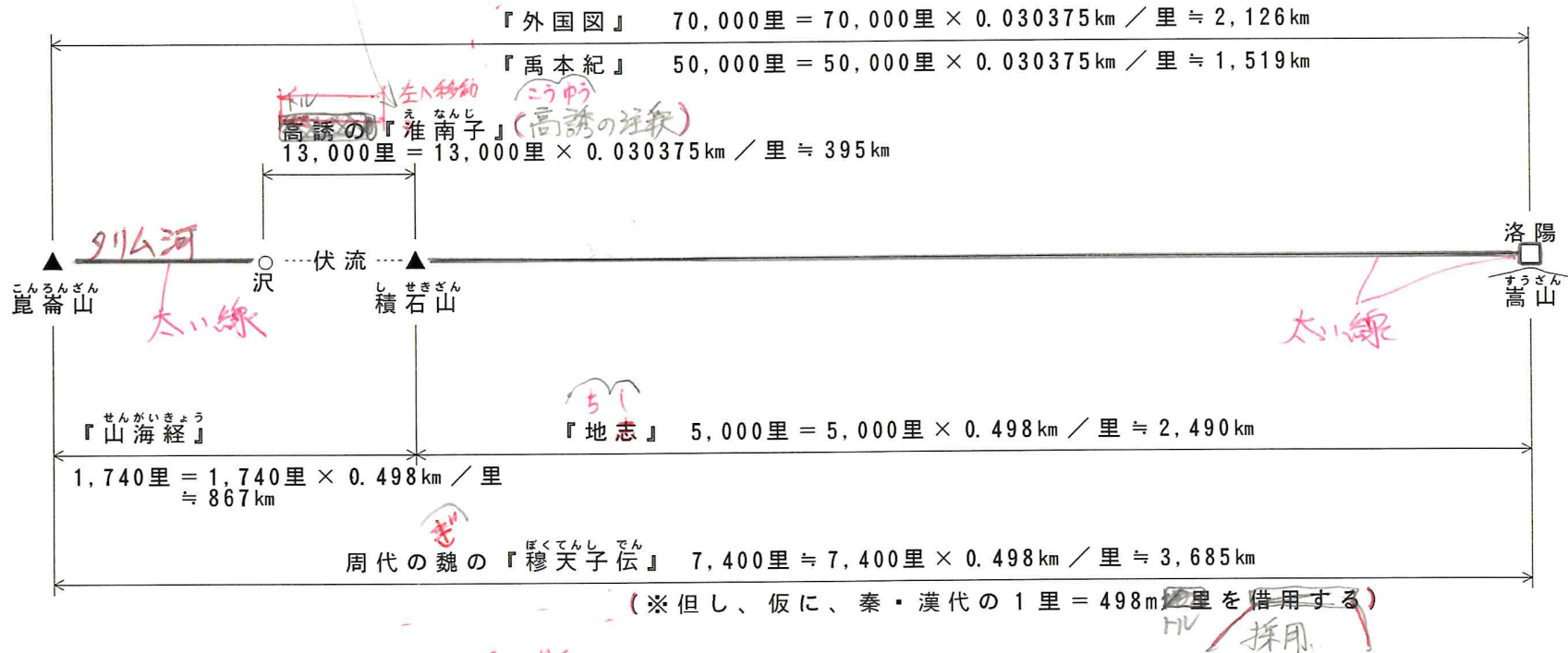
右頁の上半分に、
はみ出して大きく掲載下刊。

1,465^P - 3/4

淮

〔極小里〕

〔一般里〕



14QGゴ4
中心ふりわけ

第260図 崑崙 - 洛陽間の『里数』

「洛陽伽藍記水經注」平仄、119頁参照。

- ④ 1458^P
- 秦・前漢の1里 = 498^m / 里
- ④ 1430^P 周尺
- ④ 1450^P 里

13QG

849^P

前代未聞 元2133 陰阻 713 経籍 馬子の経典

河宗(河) 河重 3116°-1/2
1,465-P44

穆天子伝 小林 719

元1260 水経注 119° 元1260 水経注 119° 131°
千貫石山 陽山 130° 元242

高誘

高誘 2504 高誘 2063

高誘 242 無

12.5 M

周代の魏の襄王(前三三五-前三九)の墓から発掘された最古の
を果べると、天子(周の穆王)は崑崙山から宗周にもど
られた。そこで西土からの道のりを計算して
みると、宗周の濠水から西へ、河宗の邦、陽
紆の山に至るまでが三千四百里。陽紆から西
方の河水の首に至るまでが四千里である。と
あり、合計七千四百里となる。
外国図にはまた、大晋国から正西へ
七万里にて、崑崙の墟に得る。神仙たちがこ
に住まわれている。と、諸説紛紜といっている。
道は陰阻でかつ長く、経籍・記録は古く欠
落はあり、水路・陸路の違ひもあれば、径路
も同じではなく、浅見・未聞の私など、究め
つくすことのできるものではないが、いささか見聞を

⑤ 1452P

⑤ 1464P-4/4
16~175 ①②

1,430.00 ±
498 3700000m
29,116 里
37 12700,000 ±

1466P
1461P
1458P

⑤ 1462P
3700km

興味深、⑤ 1470-1/6 49
注目した ⑤ 1470-3/6 89
注目した ⑤ 1470-3/6 179

ひん小 小林 425P
改行

大 小林 925

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

と想像される。
その時代の一里が約三〇里だったのではなからうか。
一歩(二足) 六尺×二三・五センチ 一・三五メートル
太伯の後と自称する倭人達は、

